

## 読書中毒者の告白

結城俊哉

人間総合科学研究科助教授

本の匂い。

最近、研究室の模様替えをしている。やっ  
てることは、机の配置換えと本と雑誌の整  
理程度なのに、これが意外と時間がかかる  
のである。僕の場合、その最大の原因は、  
あの、古本特有の匂いにあると思う。たと  
えば、書棚の後ろ側や段ボール箱の底に置  
き忘れていた何冊かの古本特有の匂いを放  
つ本と出会った途端、その匂いに刺激され  
て、早速、その中の一冊を手にして、黙々  
と読み始めて、懐かしい思い出にしばらく  
ふけることになる。何故か、今まで置き忘  
れていたくせに、発見した本の一冊一冊に  
まつわる思い出が脳裏を駆け巡る。えーと、  
これは確か、新宿の紀伊国屋書店の3階の  
左側の書棚にあった本であるな。その時は、  
何だかすぐにも読めるような気がして衝  
動的に購入した割には、自分の書棚の中  
に置いた途端に安心して、そのまま、パラ  
パラと眺めるだけの日々が続き、結局読まず

じまいの本も結構ある。いつか時間ができ  
たらじっくり読もうかなと考えたら最後で、  
迷宮入りになるケースも多々ある。しかし、  
読み切れると判断できる本ばかりを選んで  
いては、本との出会いはつまらないだろう。  
読み切れると判断できる本は、読書の醍醐  
味に導かれることがあまりないように思う。  
本との出会いは、人との出会いにも似てい  
るのである。

何人の人と出会い、何冊の本との出会うのか

以下は、かなり個人的な見解なのだが、  
つまり、本は、いつでも読める状態にして  
おくことが実は、一番大事なことなのであ  
る。したがって、僕は、図書館の仕事は、人  
類の知的遺産の存続には、欠かせない重要  
で献身的な仕事であるように思える。そこ  
で自分の場合は、自分の本には、一見、他  
者からは、乱雑な子どものおもちゃ箱のよ  
うに見えるものようだがそれぞれには、

何故か定位置があるものなのである。以前、パソコン用のデータベース・ソフトを購入して、自分の持っている本をデータベース化しようと試みたことがあったが、入力する手間や、パソコンを起動させて検索するまでの時間を考はじめたら、バカらしくなって放棄したこともある。結論としては、ひとり一人分程度の蔵書に関しては、自分の記憶をたどって書棚の前でうろうろと、あれこれ思い出しながら検索する方が、迅速且つ的確に目的の本へたどり着けることを知ったのである。余談だが、人は、一生の間にどれだけの本を読むことができるのだろうか。今までは、まだ考えたくもないことだった。しかし、つい先日、人が、生まれてから死ぬまでの間に、何人の人と出会うことができるのか考えてみたことがある。一秒毎に違う人と出会うと仮定した場合、100歳まで生きたとして、出会える人の数は、1日は、(24時間×60分×60秒)×1年(365日)×100年=3,153,600,000人である。つまり、約32億人である。そして、世界の人口は、約64億人(2004年現在)であることを考えると、どんなに頑張っても、世界の半分の人達とは、一生の中で出会うこともなく人の寿命は尽きてしまうことになる。まさに、一期一会である。

翻って、本との出会いは、(実は、人も同様なのだが)、どうなのだろう。僕の読書経

験では、1秒で読み終わることの出来た本は、今までに出会ったためしがない。最初の数百ページで、馴染めずに挫折した本は数多くあるが…従って、読める本の数32億冊以下であることは、確かだが、具体的な数は考えられない。開き直って、読書は、量と質のバランスが重要なのである(納得!)。それでも、とにかく読むために本は、購入したのだった。そんなことを考えながら、本を整理していて、一冊一冊が愛おしくなる。時に、なぜ、この本を読もうとその頃は、考えたのか疑問を感じさせる本もまた何冊か掘り起こしてしまい、しばらく考え込んでしまう。まさに、読書することは、考えることなのである。僕は、書齋の考古学者状態にトリップする。そのため、結局、片づけが遅々として進まないまま、懐かしい時間だけが過ぎ去ることとなる。

### 読書が趣味になった理由

この機会に、僕の読書中毒の原点と言わべき「本の匂い」へのこだわりで思い出したことがある。その頃、大学生だった僕は、退屈な講義は、パスして、いつもの散策コースである神田の古本屋街を、ふらふらと、そして、ぶらぶらと、さらにぶらぶらと歩いていた。ある時、それは、とある古書店の奥の書棚にあるカビ臭い本特有の匂いが強く漂う1冊の本を、ふと手に取った経験

から始まった。その本は、哲学関係の希少本の為か、出版された当時の定価は、2千円なのに、2万円の値札がついていた。僕は、一瞬、軽い目眩を覚えた。僕の、財布の中身は、日々の最低生活費しかない。古書店側の値段設定の仕方には、疑問を強く感じるが、叫吟しながらもその場はとりあえず断念、判断を中止（エポケー／epoche）する。すると、翌日も、妙にその本のことが気にかかる。もし、他の知らない誰かに、購入されてしまったら、どうしよう。不安な気持ちで僕の胸をよぎる。そうなると、僕は、一生後悔することになるのではないか。何か、切ない恋心（？）に似た感情が突然わき起こる。僕は、当時から、本は、借りて読むものでなく、自分で買って読むものであることにこだわっていた。バイトするか、どうするか迷った挙げて、バイトする時間よりも読書の時間を優先させることにした。これは、何だか、矛盾しているが、一刻も早く読みたかったのだとしか言いようがない。

そして、実行したことは、夜討ち朝駆けで連日読書する為とその古書店に通うことにしたのである。そして、お店の人の様子／気配を伺いながら、適当な時間に切り上げて、自分専用の本を读了したところに挿んで、書棚の目立たない場所へそっと戻す。その生活は、読み終わるまでほぼ1週間続

いた。お店の人には、きつと奇妙で迷惑な客だったに違いないが、不思議と何も言われなかったのである。当時の僕は、その本を読みながら、何やら本の行間のところどころに眩きに似た書き込みを発見したり、赤い線が引かれている部分に出会うと激しく心を揺さぶられた。その瞬間、手にしている本の内容への集中力と興味が倍增するのを感じていた。その理由は、未だによくわからないが、同じ読者としての奇妙な連帯感を強く感じたせいかもしれない。今では、僕も本への書き込みや線引きを読書習慣としている。

そして、その頃から、読書が、僕の正真正銘の趣味となった。

それから、26年後の今

それから、26年の歳月が流れた。今は、教育と研究の為に図書購入をすることが日常の行為となった。自分では買えない高価な本でも、図書館に購入依頼の希望を出す。「御希望の図書が購入されました」の連絡をもらう。心底とても嬉しい。さっそく足取りも軽く本を眺めに行く。でも、最近、何かが違うと感じる。自分の中の違和感を意識した。そうだ、いつの間にか、読書が仕事の一部になってしまった。

研究室の模様替えの話に戻ろう。「積ん読も、読書の内」と考えていた僕だが、「も

う2回は読まない本、誰かに読んでもらいたい本、今後も読みそうにない本」があることに気がついた。そして、その類いの本を段ボール箱にいれて、研究室を訪れた学生達に、「読みたいと思う本は、差し上げます」ということにしている。しかし、勉強熱心な学生から、僕が、まだ手元に置いておきたい書棚にある本をさして、「先生、この本を貸して下さい。」と頼まれることがある。この場合、正直困ってしまうのである。学生を応援したい気持ちが葛藤する。学生に貸すと帰ってこないことがあって、失った本の痛い記憶が蘇る。多くの場合「その本は、今後、しばらく、仕事で使う予定だから、ごめんなさい駄目だよ。」と、丁重にお断りすることになっている。残念そうな顔をする学生が、「本は、高くても買えないですよ。」とねばる。すると僕は、「本当に読みたいければ、身銭をきって自分で購入することだよ。それが、無理でどうしても読みたい本ならば、ここなら、立ち読み自由ですよ。」と伝えることにした。

そして今は、「読むべき本、読みたい本、読むかもしれない本」に分類整理する作業に取りかかることに決めた。ふと、気が付くと、あの懐かしい本の匂いが部屋中に漂っている。いつの間にか、研究室の書棚が、神田の古書店の風景と重なった。

(ゆうき としやノ社会福祉学)